



2011年1月25日 更新

はじめに

モニタリングサイト1000(モニ1000)沿岸域調査では、平成20年度から「磯」、「干潟」、「アマモ場」、「藻場」の4区分において底生性の生物などを調査しています。「干潟」とは、砂泥質の遠浅な海岸であり、内湾や河口域などの波の穏やかな潮間帯にできます。干潟は生物多様性が極めて高い生態系であり、希少種も多くみられます。しかし、干潟の面積は開発などにより減少の一途を辿っています。本調査では、干潟表面や砂泥中を生息地とする生物の種類や数の変動をモニタリングします。毎年、各サイト複数の地点で底生生物の生物相を調べることで干潟の長期変化をとらえ、生態系保全対策のための基礎情報を得ます。平成22年度は日本沿岸の8箇所のサイトで実施します。



更新履歴

- ・2010年8月18日 松川浦、盤洲干潟、汐川干潟、中津干潟、永浦干潟、および石垣川平湾サイトの調査結果を掲載
- ・2011年1月25日 厚岸、南紀田辺サイトの調査結果を掲載

松川浦サイト (福島県相馬市)

2010年5月19日にA、Bの2地点で調査しました
(サイト代表者：鈴木孝男・東北大)。

A：潟湖干潟の通水路に近い、主に砂質の入江です。潮上帯には塩性湿地、潮下帯にはアマモ場がありません。干潟には海苔棚が多く設置されていました。ホソウミナとマツカワウラカワザンショウが全体で優占し、潮間帯上部ではニホンスナモグリのマウンド(巣穴から運び出された砂が盛られたもの)が、潮間帯下部ではユビナガホンヤドカリが多く見られました。また、塩性湿地にはフトヘナタリとウミニナが少数ですが生息していました。



松川浦 A 地点：ニホンスナモグリのマウンドが多く見られる

B：松川浦の最奥部に位置し、平坦な砂質の干潟が広がるところです。砂底内部は少し還元的な状態(酸素が少なく、黒っぽい色をしている)でした。潮間帯上部にはマガキやムラサキイガイの小さな礁(群れ)が点在していました。ホソウミナが優占し、

マツカワウラカワザンショウ、ヤミヨキセワタが全域で見られました。また、潮間帯下部では埋在生物（砂中に生息する種類）としてオキシジミが多く出現しました。なお、平成20年度には1個体が見つかったものの、21年度には出現しなかった外来種のサキグロタマツメタが数個体出現したことから、松川浦全域に分布が広がったものと思われます。



ツバサゴカイの棲管、小さな点々は
マツカワウラカワザンショウ



松川浦 B 地点: 平坦な砂質干潟



干潟で優占するホソウミナ

【サイト代表者・調査者・調査協力者】
鈴木孝男、佐藤慎一、鳥居洋、千葉友樹（東北大）、
内野今日子（東邦大学東京湾生態系研究センター訪問研究員）

写真撮影: 鈴木孝男

盤洲干潟サイト（千葉県木更津市）

2010年6月24、25日にA、Bの2地点で調査しました（サイト代表者：多留聖典・東邦大学東京湾生態系研究センター）。

A：小櫃川河口の右岸沖に広がる、主に細かい砂質の前浜干潟です。潮間帯上部・下部ともに、ほとんど植生はありません。今回の調査において、表在生物は、上部ではホソウミナ、ウメノハナガイモドキが、下部ではイボキサゴ、バカガイ、テナガツノヤドカリが、全域でツツオオフエリアが多産しました。埋在生物は、上部でコケゴカイが多産したほかは、表在とほぼ同様の出現種でした。定性調査では、ナミノリソコエビやエビジャコ属などの小型甲殻類が多く見られました。



調査地風景: 前浜干潟(A 地点)

B：小櫃川河口右岸に形成された後背湿地内部に上部の測点を、本流際に下部の測点を設けました。上部は軟泥質、下部は砂泥質で、上下とも周囲にはヨシ原が形成されています。表在生物は上部ではチゴガ

ニ、ヤマトオサガニなど、下部ではコメツキガニなどのカニ類が優占し、埋在は上部ではカワゴカイ属、ハサミシャコエビ、下部ではコケゴカイ、ホソイトゴカイ属などが出現しました。定性調査では、複数種のカワザンショウ類、ベンケイガニ類が出現しました。



A 地点で多産したテナガツノヤドカリ

【サイト代表者・調査者・調査協力者】

多留聖典（東邦大東京湾セ）、中川雅博（日本国際湿地保全連合）、柚原剛（東邦大院理）、飯島明子（神田外語大）



調査地風景：後背湿地(B 地点)



B 地点で多産したヤマトオサガニ

写真撮影：多留聖典

汐川干潟サイト（愛知県豊橋市）

2010年5月17日にA、Bの2地点で調査しました（サイト代表者：木村妙子・三重大）。

A：汐川の河口から田原湾に広がる広大な干潟の中央部です。底質は砂泥質です。今年も昨年同様アオサの堆積は見られませんでした。表面にはウミニナとホソウミニナが全体に生息していますが、潮間帯上部ではそれらに加えてヘナタリが多く、下部ではアラムシロガイが多く見られました。潮間帯中部にはマガキの小集団が広範囲に広がり、そこではヒメケハダヒザラガイやタマキビなど多様性の高い生物群集が見られます。潮間帯上部の底土中にはゴカイ類が非常に多く、中部と下部にはオキシジミとユウシオガイ、ヒメマスオガイなどの二枚貝類やゴカイ類が生息しています。

B：田原湾口部に流れ込む紙田川の河口干潟です。底質はA地点より泥質です。潮間帯上部には礫が混じります。表面にはウミニナが潮間帯全体に生息していますが、潮間帯中部ではそれらに加えてホソウミ



汐川 A 地点：広大な干潟が広がる

ニナが加わり、上部ではさらにヘナタリが加わりま
す。底土中には全体にミズヒキゴカイ類やゴカイ類
などの多毛類や、オキシジミやソトオリガイなどの
二枚貝類が非常に多く生息しています。



A 地点のマガキ集団：潮間帯中部に広範囲に見られる

【サイト代表者・調査者・調査協力者】

木村妙子、木村昭一（三重大） 藤岡エリ子（汐川干
潟を守る会）、川上七恵、森本正俊（愛知県環境調査
センター）



汐川 B 地点：紙田川河口。上部に塩生湿地が見られる



ヒメマスオガイ：A 地点で確認された
写真撮影：木村妙子

中津干潟サイト（大分県中津市）

2010 年 6 月 14、15 日に B と C、2010 年 6 月 28
日に A の合計 3 地点で調査しました（サイト代表者：
浜口昌巳・水産総合研究センター瀬戸内海水産研究
所）。

A：中津川河口から中津干潟の上部までに位置する干
潟域で、高潮帯は泥質、低潮帯は砂質で、潮上帯の
一部には広大なヨシ原があります。表在生物は上部
ではシマヘナタリ、ヘナタリが、下部ではユビナガ
ホンヤドカリ、テナガツノヤドカリが多産しました。
埋在生物は、上部でヤマトオサガニ、オチバガイが、
下部でユビナガホンヤドカリ、ソトオリガイが多産
しました。定性調査では、ウモレベンケイ、クロヘ
ナタリ、カワアイなどが確認されました。

B：中津干潟中央部の干潟域で、高潮帯は砂泥質、低
潮帯は砂質です。表在生物は、上部ではユビナガ
ホンヤドカリ、ホソウミニナが確認されましたが、
下部ではほとんど生物はいませんでした。埋在生物は、
上部でニホンスナモグリ、ハサクラガイが、下部で



A 地点のヨシ原

はイボキサゴが居ましたが、いずれも個体数は少なかったです。定性調査ではケフサイソガニ、オサガニ、アラムシロなどが確認されました。

C: 中津新港に隣接する干潟域で、高潮帯は泥質、低潮帯は砂質で、中間域から低潮帯にかけてコアマモが繁茂しています。表在生物は、上部ではユビナガホンヤドカリ、ホソウミニナが、下部ではアラムシロ、ユビナガホンヤドカリが確認されました。埋在生物は、上部でイチョウシラトリガイ、オサガニが、下部ではミドリシャミセンガイ、ゴマフダマが確認されましたが、いずれも個体数は多くありませんでした。定性調査ではイボウミニナ、カワアイ、クロヘナタリなどが確認されました。



シオマネキ



B 地点の遠景



ヤマトオサガニの大群
写真撮影: 浜口昌巳

【サイト代表者・調査者・調査協力者】

浜口昌巳、手塚尚明、川根昌子、山田勝雅（水総研瀬戸内水研）、和田恵次（奈良女子大理）

永浦干潟サイト（熊本県上天草市）

2010年4月28、29日にA、Bの2地点で調査しました（サイト代表者：逸見泰久・熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター）。

A: 有明海と八代海を結ぶ瀬戸に位置する永浦島の南西部の干潟で、上部は堤防です。高潮帯は砂泥質、低潮帯は泥質で、潮上帯の一部にはヨシが見られません。表在生物は、上部ではホソウミニナ、ウミニナが、下部ではユビナガホンヤドカリ、ホソウミニナ、アラムシロが多産しました。埋在生物は、上部でハクセンシオマネキが、下部でオサガニが多産しました。定性調査ではツバサゴカイ、マキガイイソギンチャクなどが確認されました。



A 地点: 高潮帯はハクセンシオマネキが優占
B 地点: 潮上帯は自然海岸

B：永浦島の南東部の干潟で、上部は自然海岸です。高潮帯は砂泥質、低潮帯は泥質で、転石や岩礁も見られます。また、潮上帯にはナガミノオニシバ、ハマツナなどの塩性植物が見られます。表在生物は、上部ではホソウミニナが、下部ではアラムシロ、ユビナガホンヤドカリが多産しました。埋在生物は、上部でコメツキガニが、下部ではハボウキガイが多産しました。



B 地点に多産したコメツキガニ



B 地点で確認されたウミニナ類

写真撮影：逸見泰久

【サイト代表者・調査者・調査協力者】

逸見泰久、嶋永元裕（熊本大沿岸セ）、泉大智、追立泰久、瀬戸口友佳、福田ゆか（熊本大理）

石垣川平湾サイト（沖縄県石垣市）

2010年6月26、27日にA、Bの2地点で調査しました（サイト代表者：岸本和雄・沖縄県水産海洋研究センター石垣支所）。

A：川平湾の湾口近くに位置し、主に細かい砂質の干潟です。潮間帯上部ではほとんど植生がみられず、潮間帯下部付近に小規模なアマモ場が点在します。今回の調査では、大型表在生物としてフタスジナマコやカスリモミジガイが、埋在生物としては多毛類や二枚貝のウメノハナガイが多く出現しました。植生のある場所では比較的底土が硬く、埋在生物が少ない傾向にありました。

B：川平湾の最奥部に位置し、やや荒い砂質の干潟です。潮間帯上部ではほとんど植生がみられず、潮間帯下部にわずかにウミヒルモが生育します。今回の調査では、昨年同様ミナミコメツキガニや多毛類がよく観察されました。定性調査ではミクニシボリザクラやカワラガイなど多くの二枚貝類が出現し、多様性が豊かでした。



調査地風景：アマモ場が点在するA地点



殻長約 2cm のミクニシボリザクラとハスメザクラ(橙)



定性調査で観察された様々な貝類

【サイト代表者・調査者・調査協力者】

岸本和雄（沖縄水海研セ石垣）、久保弘文（沖縄水改普セ）、栗原健夫（西海区水研石垣）、狩俣洋文（沖縄県水産課）



定性調査で出現したカワラガイ

写真撮影：岸本和雄

厚岸サイト（北海道厚岸群）

2010年7月11日にエリアA、7月13日にエリアBの2地点で調査しました（サイト代表者：仲岡雅裕・北海道大）。

A：厚岸湾の奥部、厚岸湖の出入り口に近いところにある幅の狭い砂質前浜干潟です。潮上帯にはわずかに海岸植生が残っていますが、すぐ後ろにはコンクリート護岸があります。一方、潮下帯はアマモ場となっており、コアマモとアマモが生えています。底土の表層に生育する表在性の生物は、アマモ類のほかスジアオノリなどの緑藻がパッチ状に分布していました。一方、底土中に生息する内在性ベントスは、アサリやウバガイなどの二枚貝、ミズヒキゴカイなどの生息が確認されました。

B：厚岸湖の東側最奥部のトキタイ川の河口部に広がる泥質干潟です。潮間帯中部から下部にかけてはコアマモが生息する一方、干潟の陸側は一段高いピート台地となり、シバナやアッケシソウが生育する塩性湿地が広がっています。干潟の表在性動物ではホソウミニナが優占する一方、内在性ベントスでは、オオノガイ



厚岸A地点：砂質の前浜干潟



厚岸B地点：泥質の河口干潟

やソトオリガイなどの二枚貝類、ゴカイ科に代表される多毛類が出現しました。

【サイト代表者・調査者・調査協力者】

仲岡雅裕（北海道大） 濱野章一、桂川英穂、本多健太郎、渡辺健太郎（北海道大）、ナパクワン・ワンペッチ（千葉大）、ローラ・レイノルズ（ヴァージニア大）



エゾシガケガイ



アッケシソウとアッケシカワザンショウ

(写真撮影：仲岡雅裕)

南紀田辺サイト（和歌山県田辺市）

2010年5月14日と15日にA、Bの2地点で調査しました（サイト代表者：古賀庸憲・和歌山大）。

A：湾中央に位置し水路でのみ外海とつながる潟湖です。潮間帯上部の岸寄りの場所はやや固く長靴でも歩けませんが、滞筋に近い場所はぬかるむので歩けません。潮間帯下部はアオサが表層の大部分を覆っています。

潮間帯上部、下部とも豊かで多様な生物相が形成されていました。上部では甲殻類が特に多様で、個体数も多く見られました。また、コゲツノブエとホソウミナナの個体数が極めて多く記録されました。下部では、腹足類、二枚貝類、甲殻類、多毛類の出現数が多く、アナジャコ類に寄生するマゴコロガイや、ウモレベンケイガニなどの貴重な種も確認されました。

B：湾中央ではあるが小さな入り江の先端近くに位置し、潮間帯上部は砂質干潟の典型種が多く、大きな岩には磯に生息する種も多いのが特徴です。潮下帯にコアマモが群生し、コアマモの一部は潮間帯下部まで広がります。

潮間帯上部、下部とも豊かで多様な生物相が形成されていました。潮間帯上部では、クログチ、シロスジフジツボ、コメツキガニが多数確認されました。潮間帯下部では、コゲツノブエやシオヤガイ、マテガイ、



南紀田辺 A 地点：潟湖干潟、手前上部、奥下部



コゲツノブエ

ユキガイ、ハボウキといった貴重な種が多数確認されました。また、ツバサゴカイの棲管やタマシキゴカイの卵も確認されました。

【サイト代表者・調査者・調査協力者】

古賀庸憲、中村謙太、浜田友世、坂田直彦（和歌山大）、
香田唯（分析業）



南紀田辺 B 地点：海寄りの前浜干潟



アナジャコ類とマゴコロガイ



シオヤガイ

